秋の終わりに

松浦　純子

最近、朝起きるとまだ暗い。日の出は六時頃なので、起きてから一時間くらいたたないと夜が明けない。十月前半は暑い日が続き、夜明けがいつから遅くなったのか、全然気が付かなかった。初秋、中秋、晩秋ということばがあるが、夏からいきなり晩秋へ向かっているような気がする。

このところ温暖化の影響で、夏の暑さは異常だが、この異常が常態化している。晩秋の今思えば、体が溶けてしまいそうな夏の暑さは懐かしいが、その時は家から外に出るには勇気が必要だった。どこに行くにも熱中症予防に水、帽子、日傘を持って出かけた。夕方涼しくなってから出かけよう、なんていう考えはあまい。何しろ夕方はまだ三十度を越え、しかもアスファルトはしっかり熱を保っている。

さて、晩秋から冬の季節は大好きだ。多少寒くても着込めばどこへでも外出できる。私はハロウィーンには興味がないが、クリスマス、お正月、ピーンと張りつめた冬の夜空。これから先楽しい冬の行事が訪れる。特にヨーロッパのクリスマスマーケットは最高だ。薄暗い昼から店ごとに明かりをつけて、クリスマスツリーの飾りを売る。これを買うにはまずツリーを買わなくてはと見るだけにとどめる。道路の木々にも青や白の電球の飾り。最近日本でも見られるようになった光景だ。マーケットではホットワイン一口、パン、ソーセージなどを食べ比べて満足。特に何を買うわけでもないが、楽しんでいる人を見ているだけで楽しい。教会にはプレセピオの飾りがある。教会ごとに競っているのだろうか。最近は教会に行く人は少なくなったと言われているが、さすがにクリスマスには教会に行って、賛美歌などを歌いイエスの誕生を祝っている。日本でいえば釈迦の誕生日にお経を唱えながら祝うということか、と考える。

そしてお正月。大みそかに爆竹と花火で新しい年を迎えることを祝うか、過ぎていく年を静かに振り返り新年を迎えるか、これも地域によって随分違うものだと感じている。